
单品集うそ風味

runaway

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

単品集うそ風味

【Nコード】

N6322W

【作者名】

runaway

【あらすじ】

焼き鳥、ピッツア、生春巻、チゲ鍋、モツ煮込み、刺身、チャンプルー、おでんetc。食べきり単品の軽いおつまみをご用意しました。じゃなくて、読み切り単品の軽い短編集です。へんな味がするかもしれません。※全体に短めの小ネタ話です。最新話『ひ・みつ』：うそ発見器／『正月の病』：腹もち病／『月うさぎの見る夢は』：うさぎもち誕生秘話

01. 異世界トリッパー

毎月購読している『まじかる☆まじっく』の最新号を手に入れた。

今月の特集は「日常脱出！ 異世界トリップのススメ」。

付録としてなんと異世界トリップテンプレート集までついている。ひとつひとつのシチュエーションと封印術式がセットになっており、状況を再現して封じ込められた術を解放すれば、異世界に遊びに行けるというわけだ。

面白いのでさっそく試してみた。

V R M M O R P G からログアウトできなくなったら異世界だった。

雨上がりに空が映った水溜りに踏み込むと異世界だった。

地面に開いていたマンホールに落ちると異世界だった。

突然夢の中で神様が話しかけてきたら異世界だった。

歩いていてトラックに撥ねられると異世界だった。

風呂でいい気分で居眠りしてたら異世界だった。

国境の長いトンネルを抜けると異世界だった。

マンションのドアを開けたら異世界だった。

勇者様として召喚されると異世界だった。

山で迷って人里に出たら異世界だった。

流れ星にぶつかったら異世界だった。

通り魔に刺されたら異世界だった。

夜寝て朝起きると異世界だった。

死んで転生先が異世界だった。

引っ越し先が異世界だった。

お隣さんが異世界だった。

商店街が異世界だった。

学校が異世界だった。
家が異世界だった。
遠い世界だった。
胃世界だった。

あれこれ試して辿りついた異世界で遊んでは、冊子の後半に封じられている帰還テンプレート術式で帰還する。

そしてさんざん異世界ライフを満喫して、いつもと同じように帰ろうとして――。

帰還の術がどれも使用済みになっていることに気付いた。

異世界トリップは、行きのパターンは多いが、帰ってくるパターンは意外に少ないのだ……。

というわけで、やむなく私はこの異世界で生きていくことになった。

こうして、もうひとつ異世界トリップテンプレート集に「異世界に行きまくって帰れなくなった」なる新たなテンプレが加わった。

……かどうか、私に知るすべはない。

01. 異世界トリッパー（後書き）

トリッパ（Trippa）は、ハチノスを中心とする胃や腸の煮物。イタリア北部などで広く作られている。ハーブを少し入れた湯で、臭みを取り除きながら柔らかくなるまでこと煮、塩味その他、トマト、ニンニク、ワイン、チーズなどで味を付けることが多い。

<Wikipedia「ハチノス」より引用>

とは関係ありません。

02. 悪魔の誘い

もうどうにもこうにもなくなっていて、ついうつかり悪魔に頼ってしまった。

「悪魔でもなんでもいい！ 助けてくれ」

「喚よんだか？」

やけくそで喚わめいたら、本当に悪魔が現れたのだ。

悪魔はにたりと嗤わらって言った。

「さあ、では契約だ。その願いを叶えるために、代償としてお前は何を差し出す？」

「くそっ、命以外ならなんでもいい！」

「承知した。では命の次に大事なものをいただこうか……」

浮かび上がった魔方阵に指を噛んで血をたらし、契約が交わされた。

悪魔はまがましい翼を広げ、凶悪な鉤爪を宙にかざし、雑音めいた呪文を唱えて、あっという間に願いを叶えてくれた。

無事契約が果たされると悪魔は言った。

「では代償をいただくぞ」

何を持っていかれるのかびくびくしていると――。

悪魔は私がかけていた眼鏡を奪い取った！

うわあ、そいつは困る。何も見えない。

自分は極度の近眼なので、眼鏡がないと生活できないのだ。

ぼやける視界にパニックに陥った私をさんざんからかって楽しんだ後、哄笑を響かせながら悪魔は去っていった。

とるものもとりあえず近場の眼鏡店に駆け込み、新しい眼鏡を購入した。

眼鏡ができるまでの数日間は本当に不自由した。

いやあ、ひどいめに遭った。

それにしても、命の次に大事なものが、金で買えるもので助かった……。

03. 周回遅れのフルデイ（前書き）

今日は4月11日です。

4月11日。しがつじゅういちにち。the 11th of April。

オーケー？ レデイ、ゴー！

03. 周回遅れのフルディ

忙しく過ごしているうちに、4月1日を逃してしまった。

あれほど楽しみにしていたエイプリルフル。悔しいなあ。
そうこぼしたら、友人が教えてくれた。

「じゃあチャレンジする？ 周回遅れエイプリルフル」
「なんだそれ」

話によると、うそをつき損ねた人のために、4月1日にも十日遅れのエイプリルフルという設定日があるそうだ。

ただし、神のお情けによるワンチャンスなため、中途半端なうそは赦されない。

しかも10回に1回は神様の加護が効かなくて、うそが本当になっってしまうらしい。壮大なうそをついた挙句にとんでもないことになりかねない。

さらには、もともとあまり有名でもないイベントのため、周囲に失笑されて恥をかくリスクも高い。

十日遅れるぶん、成功率も10%がいいところということらしい。

聞けば聞くほど、ハイリスクローリターンだ。

さすがにそこまでしてうそをつく気にはなれないなあ。

そう言うと、友人はうなずき――にやりと笑った。

「うん。だろ。」

……ってのはどうだ？」

あっ、くそ。

やられた！

「うそかよ」

「周回遅れで年中行事なんてあるわけないじゃん……」

そのとき、突然耳鳴りがして頭の中に声が響いた。

『なかなかいいうそだったぞ。相手を完全にだましたしな』

二人で驚いて周囲を見回したが、俺たち以外の姿はない。
声は続けた。

『では11日ゆえ、判定だな——おっと、外れだ。このうそは保護
されない』

「えっ……」

『じゃあ、4月11日は周回遅れエイプリルフルってことで、今
から確定な。』

やれやれ仕事が増えちゃったなあ』

妙に楽しいな様子のつぶやきを最後に声は途絶えた。同時に耳鳴
りも治まる。

俺と友人は顔を見合わせた。

「これもうそか……？」

「さあ……。でも今の“外れ”とか、絶対わざとだよな……」

「神様もうそ好きなのかな……」

うそなのかうそから出たまことなのか、よく分からないが。

次から4月11日のうそには、気をつけたほうがいいかもしれない。
い。

04. 生きている乳酸菌

冷蔵庫の中にプレインヨーグルトがあったので、食べることにした。

封を切って皿に取り分け、スプーンに付いたヨーグルトを舐め取る。

そして付属の砂糖の袋を破いて、上にかけてようとした、そのとき。

『あなや!』

腹の中から声が聞こえた。

『同志よ、心せよ! 彼の地は悪玉菌の巣窟ぞ!』

皿のヨーグルトがざわざわと色めきたつ。

『そはいかに!? しかと承った! 我ら今より一致団結して討ち入らん!』

「あ、あの?」

呟くと、ヨーグルトは言った。

『安心召されい! みどもの手にかかれば、悪しきウェルシュ菌なぞ死したも同然! ささっ、召し上がられよ!』

「じゃあ……」

『あいや待たれい!』

ところが改めて砂糖をかけようとすると、怒られた。

『糖分はならぬ！ 敵に塩を送るようなものじゃ！ ここはぐぐつと堪えて、きな粉にてもどもを加勢されたし！』

そう言えば、何かの健康番組で、ヨーグルトにはきな粉をかけて食べるのいいとか言っていたような気がする。乳酸菌が活性化するとかなんとか。

仕方なくきな粉をかけて、ぐりぐりとかき回した。
不味そうだなあ……。

『早う、早う増援を！ ぐおおお！』

腹の中では、先に攻め込んだヨーグルトが断末魔の悲鳴をあげている。

『準備は整えり！』

高らかな宣言と共に、ヨーグルトが鬨^{とき}の声をあげる。

『もはや一刻の猶予もならじ！ いざ討ち入りのとき！』

『ウェルシュ菌の牙城を陥落せよ！』

『乳酸菌、万歳！』

『万歳！』

……これ、食うの……？

05. 虫食い魔法

久々に空飛ぶじゅうたんを引っ張り出してみたら、虫食いだらけになっていた。

空飛ぶじゅうたんの魔法は、じゅうたんに織り込まれた魔方陣に宿っている。こんなに穴だらけになつては、もう使えないかなあ。

一応、明らかに途切れている場所などを補修して、駄目でもともとということに乗ってみた。

「トーリ山イオキリヤ谷のマデラニ婆さんちへ」

行き先を告げると、じゅうたんが波打ち、浮き上がった。

おっ、いけるか？

しかし次の瞬間、急上昇したじゅうたんはめっちゃくちゃに暴れ始めた。必死につかまっているうちに、危険な旋回を経て、ついにはきりもみ状態で地面に落ち始める。

うわー死ぬ！

ずどんと凄まじい衝撃があつたが、じゅうたんに包まれながら落ちたせいで大きな怪我はなかったようだ。

ほうほうの体で絡まったじゅうたんから抜け出す。

やっぱり適當なことはするもんじゃない。

頭を振ってめまいを払い、顔を上げる。

すると目の前には、壁全体に蔦がびっしり絡んだマデラニ婆さん

の家があつた。

「なんだい、今の音は！」

飛び出してきた婆さんが、こちらの姿を見るなり驚いて言う。

「おや、早いね。ついさっき連絡をくれたばかりなのにもう来たのかい」

魔法糸電話で「今日行く」と連絡したのは、じゅうたんに乗る直前だった。

婆さんちは森を三つと山二つと湖を越えた先にあり、空を飛んでも半日がかりだ。

どうやら虫食いじゅうたんの補修の際に、飛行の魔方陣がどうにかなって転移の術式に改変されてしまったらしい。

転移を封じた魔法具なんて、聞いたこともない。
偶然のものすごい奇跡ではあるけれど――。

あのきりもみ落下。

帰りもこれを使う気にはなれないなあ……。

06. おつかれさん

最近、残業続きで体調を崩し気味らしく、特に肩こりがひどい。だんだん悪化して身体全体が重くなり、何もやる気になれなくなってきた。

「つかれたときは駅前の店がいいよ」

同僚に勧められ、ある日その店に行ってみた。

ビルの十三階の奥に位置するその店は、明るくて間口も広く、入りやすい雰囲気だった。ステンドグラスを窓に配した西洋風の小ぎれいな内装で、リフレクソロジーかマッサージのサロンといったところか。

案内されて奥の個室に行くと、ゆったりとした白衣姿の男が出てきた。

彼は私を見るなり言った。

「ああ、ずいぶんつかれてますねえ」

「そうなんですよ。なんだかだるくて」

「でしょうねえ、じゃあそこに寝てください」

マッサージ師らしき男は、うつぶせになった私の肩に軽く触れた。

そしていきなり私の背中を平手でばしと叩き始めた！

「ほら、さっさと楽になりなさい！」

「あいててててっ」

力任せの容赦ない平手打ちで、かなり痛い。

拳でやるならともかく、こんなのとてもマッサージとは思えない。

「なにするんですか……いたた！」

「えいえいやあ！」

「ぎゃあー！」

こちらの抗議を無視して私を打ちさえ続けた彼は、しばらくしてから突然叩くのをやめた。

「はい終わりました」

とんでもないへぼマッサージ師だ。

起き上がって文句を言おうとしたが、それよりも早く目の前に銀の十字架が差し出される。

「これをどうぞ」

「なんですか、これ」

「お守りです。しばらく持ち歩いてください。一応霊は落としましたが、念のため」

白衣の男はにこやかに言った。

「たくさん憑いてましたよ。」

疲れると抵抗力が弱って、どうしても憑かれやすいんですね」

言われてみれば、さっきまでのだるさが嘘のようになくなっている。

身体も軽い。

友人に報告すると、彼女はうなずいて言った。

「うまいでしょ？ あエクソシストの除霊屋」

06. おつかれさん（後書き）

おつかれさまでした。

07. エンドレス ラブ (前書き)

「じゃあな、まちこ……」

「よしおさん、いやあ、よしおさあん！」

07. エンドレス ラブ

「お願いです神様！ 彼を助けてください」

『対価は？』

「私の命を差し上げます」

『よからう』

「じゃあね……よしおさん……」



「神よ、お願いです。彼女を生き返らせてください」

『対価は？』

「ぼくの命と引き換えに」

『よからう』

「ばいばい……まちこ……」



「お願い！ 彼の、よしおの魂を呼び戻してください！」

『対価は？』

「私の魂と交換で」

『よからう』

「さよなら……よしおさん……」



「お願いです！ まちこを、まちこを！」

『対価は？』

「ぼくの魂を持っていってくれ！」

『よからう』

「まちこ……きみさえ生きていてくれれば……」



「よしおさん、よしおさんをつ」

『対価は?』

「私が身代わりにつ……」



『お前、いつまでやるんだよ……』

『いや、いつまで続くのかなって思ってたさ……』

「まちこおおっ」

『お、また来た……』



「よしおさんを!」

『対価は?』



「まちこを!」

『対価は?』



※繰り返し×∞

「――よしおさんを助けてっ」

『対価は?』

「……私の命……いえ、私の来世の命で引き換えられる?」

『ほう、そうきたか。』

ふむ……残念なぐらいささか足りんな』

「そんな!」

『そうだな、あとひとり分は必要だ』

「じゃあ、じゃあ、よしおさんの来世も……っ」

『よかろう』

「ごめんね、よしおさん。勝手なことして」

「いいんだ、まちこ。」

神様が言ってたよ。来世がないから、今生が永久に続くって」

「えっ、それって……」

「ぼくたちは永遠に一緒さ。まちこ」

「よしおさんっ……」

07. エンドレス ラブ（後書き）

『そんなのありかよ』

『まあ、いいだろう？』

楽しませてもらったしな』

08. 近未来ファンタジー的プロローグ

増え続ける宇宙のゴミーースペースデブリ。

耐用年数を過ぎた人工衛星の残骸や、砕け散らばった部品たち。

かつての開発の名残にして、いまや地球を覆い、人類の宇宙進出を妨げる邪魔者。

そのスペースデブリ対策の最後の切り札たる作戦が実行されることになった。

隕石落下魔法の詠唱装置を搭載した人工衛星を打ち上げ、地球周^{メテオインバクト}辺のデブリを意図的に衛星に墜とすのだ。

すべての準備は順調に進み、いよいよ魔法的宇宙塵掃討計画（Space Debris Magical Eraser Project）実行のときが来た。無人ロケットで打ち上げた魔道衛星SSC（Shooting Stars Collector）が無事に目的の軌道に投入されたのを確認したところで詠唱装置を起動。

やがてカメラに次々と墜落する金属片が映し出され始めた。

成功だ。

これで宇宙開発のリスクは大幅に減少する。

科学と魔法の融合が、新たな道を拓いたのだ。

だが。

人々が計算違いに気付くまで、そうかからなかった。

ありとあらゆるデブリが超高速で衛星に衝突するエネルギーは、想像を遥かに超えたのだ。

衝突エネルギーは一瞬で熱に変換される。

外部から絶え間なく供給される熱で魔道衛星は温まり――。

ついには自体が火の玉と化した。

半永久的なループ機構を組み込まれた隕石落下魔法自動詠唱装置。
科学の粋を集めた耐熱装甲に加え、幾重にも施された自己修復魔法。

緻密な計算と先端技術に魔法を加えて実現した軌道維持プログラム。

SSCは灼熱をその身に宿しながら、休むことなく流星を蒐集し続ける。

地球はこの新たな小太陽に炙られて、急速に温暖化ならぬ高熱化していった。

大気は熱風のハリケーンにかき回され、海は蒸発し、陸は熱砂に覆われる。

ほどなく地球は、生命を焼き尽くす死の惑星と化した。

環境の激変で、人々は宇宙開発どころか空すら望めぬ地下深くへと追いやられた。

すべての知恵と労力が、ただ生き延びために振り絞られた。
それでも多くの人々は死に絶え、さらに多くの動植物が絶滅した。

そしてついにデブリが尽きて衛星の表面が多少冷めた頃には、
かつての文明を維持するだけの力は、人類には残されていなかった。

偉大なる科学のわざは喪われ、残ったのは、
おのが肉体に宿る力と、ほんの少しの奇跡。

すなわち剣と魔法。

純然たる力が支配する、
強き者たちの時代が始まった……。

08. 近未来ファンタジー的プロローグ（後書き）

いやまあ、SFはさいえんすふぁんたじーの略ですしね……？
始まったけど続きはなし！

09. 流星の降る夜は

今日はオニオン座流星群。

天文仲間たちと計画して、流星狩りに行くことにした。

もっとも活動が活発になる極大の時間は早朝とのことだが、オニオン座が昇る深夜ごろから流星は観測しやすくなる。郊外の開けた牧草地に陣取り、その時を待った。

「あっ、流れた！」

ひとりの声を皮切りに、次々と鋭い光を放ちながら流れ星が墜ち始める。

さあ、ここから勝負だ。

目の前に墜ちてきた光を、手にしたざるを掲げてさっと受け止めた。

見れば、目的の物体がごろりとざるの中に転がっている。

つややかな皮に包まれた大ぶりの見事な星タマネギだ。

幸先がいい。

それから全員牧草地を走り回って、流星狩りに奔走した。

流れ星を手に入れるには、とにかく地に墜ちる前にキャッチしなければならぬ。

どんな大流星でも、地に触れたが最後、あっという間にほどけて溶けてしまうのだ。

やがて深夜を過ぎて、薄明が始まる。

濃紺から藍色——そして白みゆく空に、流星は紛れていった。

みんなで集まって結果を見ると、ひとり5個程度といったところか。多いとも言えないが、まずまずだ。

中にはカボチャほどの大オニオンを捕まえた者もいる。

あまり知られていないのだが、流星群で手に入る宇宙の食材は、他にはないすばらしい味の広がりを持っている。

例えば今回のオニオン座流星群の星タマネギは、どこまでも瑞々しいのに身は締まって味も濃く甘い。これと1月3日ごろのルー座流星群で手に入るカレー粉で作るカレーなどは、一度食べたらもう二度と忘れられない美味なのだ。

これぞ天文ファンの醍醐味というわけだ。

戦利品を抱えてほくほくしながら、仲間と口々に話し合う。

「こないだのジャコテン流星群はどうだった？」

「全然だめだったよ。あれはばらつきがあるからなあ」

「あのじゃこ天、芋焼酎に激烈に合うんだけどなあ」

「俺は10年前のすし座流星群大出現が忘れられないよ。うまかったなあ」

夜はすっかり明けて、昇る朝日に目を細めてそれぞれの帰路にいった。

別れの合言葉は——。

「じゃあ、次は11月な！」

そう、次は11月のすし座流星群。

その次のあなご座流星群は12月14日。

ふふっふふふ。

楽しみだ……。。

09. 流星の降る夜は（後書き）

※元ネタ流星群。日付はおよそのピークで、年によって前後することあり。

- ・ジャコビニ流星群 10月8日
- ・オリオン座流星群 10月21日
- ・しし座流星群 11月17日
- ・ふたご座流星群 12月14日
- ・りゅう座流星群（しぶんぎ座流星群） 1月4日

流星群狩りの際は、あたたかくして風邪をひかないようにお気を付けて！

10. ご祝儀返し

ある日、家に一通の書留が届いた。

封筒には“商品券在中”と書かれている。

差出人は吉岡タケフミ。学生時代に所属していたサークルの後輩だ。

しかし、なんでこんなものを送ってよこしたのだろう。

一寸首をひねったが、少しして思い当たった。

そう言えば先日、彼が結婚したからお祝いの品を贈る、という友人の話に一口乗ったのだった。きっとそのお返しだろう。

封を切ると、もう一回り小さい凝ったデザインの封筒が出てきた。ところがそこでまた首をひねることになった。

中身はいかにも金券らしい紙幣大の紙片だったが、金額や使用可能な場所がどこにも記載されていなかったのだ。いくら表裏や封筒を改めても、文字とも模様ともつかない不思議な図柄が印刷されているだけだ。

よく判らないものの、その辺で使えそうにないことだけは確かだ。とは言え別にお返しが欲しかったわけでもない。そのまま放っておいた。

すると数日後、当人からメールが来た。

『先日はお祝いをありがとうございました。』

ところでお返しの件ですが、間違えて妻の親戚用のものを送ってしまいました……。改めて送ります。それで申しわけありませんが、

できれば最初のやつは送り返してもらえると助かります。住所はN県××××……』

ああ、なるほど。

どこか外国の商品券だったのか。

意外にそそっかしいところがあるなあ。

送り返すと、入れ違いにまた書留が届いた。

今度はきちんと地元のデパートで使える共通商品券が入っていた。

それからしばらくして、かつてのサークル仲間だった友人と飲む機会に恵まれた。

聞けば彼の結婚披露宴に出席したという。先日の商品券の一件とちょっとした好奇心もあって、お相手のことを尋ねてみた。

「ところでタケフミ君は外人さんと結婚したのかい？」

「ああ、*****さんね」

友人が口にした名前は、不思議なイントネーションをしていた。

「は？」

耳慣れない響きでよく聞き取れず、ナとコが含まれていることしか判らなかった。

「ちょっと待って」

とっさに聞き返すと、彼はとボールペンを取り出し、割り箸の袋

に何事か書き付け始めた。

けっこうな時間をかけて書き終えてから、箸袋をこちらによこす。

「あの言語、面白そうだからちよつとかじってみたんだ。ほら」

紙片にのたくる線からは、なんの意味も読み取れなかった。

だが形にはどことなく見覚えがある。そう、例の“妻の親戚用の”商品券に記載されていた不思議な図柄に似ていた。さらに読みかたの見当もつかない文字列の下には、対応するローマ字だろうか、T—A c h i b —A n a —E r —I k oと記されていた。

「トアチヒイブアナエールイコーさん。って言っても、こっちに帰化したとかで、タケフミ君には“エリコ”って呼ばれてたけどな」

「ふうん。アジア系とか？」

「いやいや。おとなりの世界から来たすごい美人さ」

友人はこちらの問いを待ち構えていたように、にやりと笑って応えた。

「真っ青な髪と見るたびに色が変わる虹色の瞳が印象的でね。奥さん側の親戚もたくさん来てたし、華やかなパーティーだったな」

「へええ」

すごいな、

と口の中でつぶやいたあとで、気付いた。

ということは、最初のあれは——。

おとなりの世界の商品券？

.....。

ま、その辺で使えそうにない点では一緒か。

そして我々はタケフミ&エリコ夫妻の恋の成就を寿ぎ、その洋洋たる前途を祝って改めて乾杯した。

ハッピーウェディング！

ふたりの未来に幸あらんことを。

10. ご祝儀返し（後書き）

タケフミ君とエリコ嬢の異世界間ロマンスは次回にて！（うそ）

11. 除湿機

あるじめじめした暑い日の夜、眠れずにごろごろしていたら呼び鈴が鳴った。

こんな時間に誰だろう。

玄関に行くと、カギも開けていないのに家の中に宇宙人が立っていた。

大きなスーツケースを持っているところを見ると、宇宙よろず屋か……。

宇宙の各星を巡ってものを売り歩く行商だ。やつらはプライベートルや時間の概念が人と違うので、けっこうこういう非常識な不法侵入をやらかす。

「間に合ってます」

「まあまあ。どんな商品でも扱っておりますので、話だけでも聞いてください」

最初は断ったが、しつこく食い下がって帰ろうとしない。仕方なく聞いてみた。

「じゃあ、この湿気なんかならない？」

「ええ、ええ、もちろんございますとも！　こちらなぞいかがでしょうか」

すると宇宙人は待ってましたとばかりに、一本のガラス瓶を取り出した。
早っ。

「……なにこれ」

「湿気を吸い込む瓶でございます。地球風に申し上げますと、高機能除湿機といったところでしょうか。キャップを回すだけでOKなので、初めてのかたでも簡単にご使用いただけますよ!」

宇宙人は熱意を込めて自慢げに言った。

「しかも効果は無限なので、交換の必要もございません。

当社が開発した画期的技術でして、内蔵の湿気専用マイクロブラックホールが周囲の水分を一気に吸収するのです!」

「……一気にとってどれくらい?」

「もう、1%だって見逃しません。半径2キロメートル内は、大気中の水分はおろか無機物から有機物からも、最後の一滴まで搾り尽くします。

恐らく地球の科学水準では、ここまでの商品はございませんかと」

「ございませんし、いりません」

死ぬじゃん。

丁重にお断りしたにも関わらず、よろず屋は引き下がらない。

「試しに使ってみてくださいよ。絶対この商品の素晴らしさに惚れ込むこと請け合いですよ!」

「けっこうです」

「そうおっしゃらずに! では私がここで実演してみましようか?

このキャップを右に3回、カチツと鳴ったら左に2回――」

「いや、いいから」

「ご自分で使われますか？　ではこちらは説明書で、ここに図解してあつて」

「もう帰ってくれ……」

さんざん一方的に説明したあげく、けっきょく宇宙よろず屋は湿気専用ブラックホール入りガラス瓶（干物／砂漠無差別製造機）を置いていってしまった。

どうするんだよ、これ……。

12. 絶対稀少プレミアム

「おめでとうございます！ 当選です！」

「うわっ」

ある休みの朝、宇宙よろず屋が突然部屋に飛び込んで来た。

幸福な朝寝をむさぼっていたところに大声で叫ばれて、びっくりして飛び起きる。

宇宙よろず屋は、宇宙人の訪問販売セールスマンだ。宇宙人なだけに世間一般の常識から斜め方向に外れた、強引というか迷惑な営業を仕掛けてくる。

しかしいくらなんでも、もう少し現地の生活様式に敬意を払うべきではないか。

いや、だからこいつの持ってくるものは売れないのか……。

そんなことを寝起きの頭でぼんやりと考えるこちらの様子にはまったく構わず、彼は一通の封筒を差し出してきた。

「我が宇宙よろず屋商会の創業記念キャンペーンでございますよ！ 先日お買い上げいただいた高機能除湿機からのご応募で、見事二等に当選されたのです」

「……は？」

寝ぼけまなこで封筒を見るが、白無地の表面には何も記されていなかった。

だがぼうつとしたまま眺めていると、やがてあぶり出しのように日本語で『視線認証完了／一致率97.2％／未加盟辺境銀河太陽

系第3惑星地球日本国』と浮かびあがった。その文字が崩れ、続いて凝った字体の『十七弦箏座楽団コンサートペア無料招待券』という文字に置き換わる。

宇宙よろず屋は封筒をぐいぐいとこちらに押しつけながら、口から緑色の泡を飛ばして興奮した調子でまくしたてた。

「二等ですが、十七弦箏座楽団の演奏会は大変に人気があつて、滅多に手に入らないプラチナチケットなんですよ。一等の逆巻ガガミ貝星団高級リゾートバカンス一週間の旅より絶対おすすめです」

「でもあの除湿機は別を買ったわけじゃなくて、あんたが勝手に…」

「とにかく！
当選おめでとうございます。お受け取りください」

宇宙よろず屋はこちらの言葉を遮って封筒を強引に握らせ、さつさと帰ってしまった。

きつと営業成績をごまかすために、自分で金をたてかえて売り上げに計上してしまっているのだろう。

封筒を開けて中のチケットを取り出して見てみると、開演は宇宙ギレゴール暦FQ-T5逆立月35日96時30分、場所はアップサラ銀河ガンダルファ星系第25惑星キンナール星サラスヴァット王国のラクシュマハ王立歌劇場となっている。

なるほど。

宇宙ギレゴール暦FQ-T5逆立月35日96時30分開演で、

アプサラ銀河ガンダルファ星系第25惑星キンナール星サラスヴ
アット王国のラクシュマハ王立歌劇場ね。

……って、

いつだ。

どこだ。

そしてどうやって行けというのだ……。

13. 地元情報

今日は毎月購読しているタウン情報誌の発売日だ。

仕事帰りに書店に寄り、目的の地元雑誌のコーナーに直行した。

平積みされた本の山からとりあえず手に取ったが、立ち読みされて少し表紙がよれている。なんとなく気分が悪いので数冊下から別の一冊を抜き取ろうとしたとき、ふと隣に見慣れないタウン誌があるのに気がついた。

最近、タウン誌も創刊ラッシュだからなあ。

その雑誌の巻頭記事は『水杜市路地裏グルメ総力特集』。

ぱらぱら見ると、けっこう色んな店が出ている。かわいいペットの写真なども載っており、価格も370円とお手頃だ。面白そうなので買ってみることにした。

ところが家に帰ってじっくり読み始めて、首を傾げることになった。

店の情報が出ていることは出ているのだが、何かおかしい。

例えば地元で有名な洋食レストランの紹介。

『この季節はスズキのポワレが人気メニューで新鮮なあらも豊富だが、超人気スポットのため閉店後45分が勝負。ただし、ランチがオニオングラタンスープセットの日は避けたほうが無難。どうしてもという場合は、右端のボックスに注意されたし』

某人気ラーメン店の記事。

『毎晩閉店後に供される魚だしと動物系のWスープはやみつきになる旨さだが、若干の旨味調味料および添加物使用。飲みすぎに注意。だしガラは平日の早朝5時に表通りの集積所に直接出される。収集車が6時には現れるため、確実を期すためには出待ちを』

激しく違和感を覚えつつも、とりあえず謎が解けないまましばらく特集以外の記事も読み進めていった。

『今月のネズミの巣』

『中央通り魚屋&寿司店マップ』

『またたびを百倍楽しむ方法』――等々。

やがて、突然はっと閃いた。
これって――。

猫のタウン誌？

だとすれば、納得できる。

グルメ記事はオススメ残飯スポット、ペットの写真だと思ったのは街角の美人野良猫スナップだったのだ。

それにしたって、どうしても気になる。自分の想像が正しいのか確かめたくて、翌日もう一度書店に行ってみた。

だが十冊程度はあったはずのその雑誌は、一冊も残っていなかった。

「そんな本ありましたか？　おかしいなあ」

店員に訊いてもあいまいな応えしか戻ってこない。

狐（猫？）につままれたような気分で帰ろうとしたとき、タウン

誌の棚の前にいる小柄な女の子に目が止まった。棚を幾度も見返しては、ため息をついている。

ん？

もしかして……。

「すみません」

声をかけると、女の子はびくっと肩を震わせてこちらを振り向いた。

色白でかわいい顔立ちをした女の子だ。頭のとっぺんで左右二つのお団子にまとめた髪が獣耳^{けもみみ}を思わせる。大きく見開かれた瞳は薄緑がかった綺麗な色で、なんとなく見覚えがあった。

多分、街角スナップのコーナーに出ていた、スレンダーな白い雌猫だ。

用心深く後退ろうとする女の子に、急いで持っていた例のタウン誌を差し出す。

「あの、これ、もう読んだから。よかったらあげます」

「……」

彼女はしばらくこちらとタウン誌を見比べた。

少しして、本をさっと取って身を翻す。

軽い身のこなしで自動ドアをするりとすり抜けて、街の雑踏へと消えていった。

――370円のふしぎ体験。

14. 街角の神

仕事帰りにバーで一杯やっているうちに、隣にいた男と意気投合した。

彼はくたびれた中年男だったが、酒がまわってくると、とっておきの秘密を教えるように言った。

「実は私は世の中をなんでも思い通りにできるんだ。世界中の川をオレンジジュースにしたり、人類すべてをハゲにしたりさ」

「へえ。そいつは凄い」

こちらも酔っているので、信じていなくたって相槌も適当だ。

そもそも、酔っ払いのほら話は壮大なものなのだ！

「じゃあ世界征服だってできるわけだ！ どうしてやらないんだ？」

「私なりの道徳と倫理ってわけさ。お優しいだろ？」

「おうおうおう。これからも清く正しく世界を見守ってくれたまえ！」

それからも延々と飲み続け、ついに明け方に店を放り出された。

二人でよろよろと早朝の薄汚い繁華街を歩いていると、彼が尋ねてきた。

「あんた、今日は仕事か……？」

「十時から……会議だけど……うつ、無理かな……」

「私もなんだよ……」

彼はつぶやくように言ってから、立ち止まって電柱にもたれた。

「じゃあ、今日は特別……」

彼の力ないつぶやきと同時に、白んでいた街が急速に暗くなっていた。

見上げると藍色を取り戻した空をふちどるように、消えていたネオンがぼつぼつと点灯し始めた。あつという間にその数を増やしていき、派手な化粧で汚濁に満ちた街の素顔を覆い隠していく。

まるでビデオを巻き戻し再生しているようだった。

やがてくたびれた朝の街は、夜の猥雑な賑わいを取り戻した。

「これで日付が変わる前に帰れるだろう……。楽しかったよ、じゃあな」

彼はそう言って片手をあげ、電柱から離れてふらふらと人混みの中に消えていった。

夢でも見たかな……。

15. 魔術師の饗宴（前書き）

11月なのにさしたる意味もなくお盆の設定でまったくもって申し訳ございません。

15. 魔術師の饗宴

お盆休みで帰省したら、買物先で久々に中学時代の同級生に会った。暑いのでどこか涼みながらということになり、近くのファミレスに入って近況を語り合った。

こちらは懐かしくていろいろ話しかけたが、しばらくして気が付いた。

どうも彼の表情が冴えない。

「実は妹が白魔術師検定に合格してね」

「へえ、すごいじゃないか」

彼の家族は全員が魔法を使う。町内でも有名な魔術師一家なのだ。

「そう言えばお前は？」

「うん……去年、心理魔術師資格を取ったよ」

「そのわりに元気がないな」

「ああ。うちっておふくろが黒魔術師で、親父が幻術師で、婆さんが妖術師で、爺さんが鎗魔術師だろ？ 全体的に白魔法とはどうしても折り合いが悪くてな。おまけに魔女は死んでも成仏に時間がかかるからさ。ひい婆さんやひいひい婆さんの霊もまだいて、もうめちやくちやだよ」

白黒あたりはまだともかく、鎗魔術って……。
いや、いいけど。

「そうか、大変だな」

魔術間の折り合いがどうこうなど、はっきり言ってあまり深く関わりたい世界ではない。とりあえず無難な相槌を打っておくことにした。

だが相手は心理魔術師だ。

当然というか、あっさり見破られてしまった。

「お前、判ってないだろ」

彼はアイスコーヒーのグラスを横に押しやり、真顔で言った。

「いいか、魔術というものはだな。迂闊に違う系統の術が混じるとすぐ危険なんだ。だいたい心理魔術と黒魔法と錆の術を混ぜたりしたら、何が起るか考えたことがあるか……」

それから家族連れで賑わう昼下りのファミレスで、彼は魔道の秘儀について延々と語り続けた。

二時間近くも禁断の外法やら精神の闇やらの話を聞かされて、こっちはすっかり具合が悪くなってしまった。町内にスズメバチとタンポポが少ない理由などは、恐ろしくて思い出す気にもなれない。今晚は確実に悪夢にうなされることだろう。

別れ際、彼は言った。

「まあ一度遊びに来いよ。ひい婆さんは生前は腕のいいイタコだったから、今もときたま仕事が来るんだ。幽霊が降霊術やる光景なんて、ほかじゃ見られないぜ！」

やだよ、そんなの。

16. 呑み助の饗宴

幻の銘酒『真・鬼壊し』を手に入れた。

せっかくだからみんなで飲もうということで、友人たちを集めて酒盛りを開くことにした。

だがやって来た呑み仲間十人のうちの三人は、いくら勧めても飲もうとしない。

「俺、鬼壊しはやばいんだよ。かわりにこれ持ってきたから、みんなも味見してくれ」

うち一人がそう言って、一升瓶を取り出した。なんと、これまた超入手困難な『神殺・極』しんさつ きわみだ。出回る数量が少ない上、万一出てきてもプレミアがついて天井知らずな価格で取引されとうわさの激レア銘柄だ。

すると今度は別の二人が困った表情になった。

「僕は鬼でいいよ。そっちはちよつとね……」

と、『神殺・極』には手をつけない。

奇妙に気まずい空気が流れ始める中、さらに別の一人が言った。

「俺も『魔王退散』は駄目なんだ。滅多に出回らないから助かるけどさ」

するとさらにもう一人が告白した。

「私は『仏殺し』だな。好奇心でちよつと舐めたら本当にひどかったよ……」

全員が顔を見合わせて、乾いた笑いを漏らした。

やがて気の利く誰かが話題を変え、別の安酒と肴を並べて大宴会に突入した。明け方に解散したが、みんな等しく二日酔いになったに違いない。

しかし十一人集まって、鬼三人、神二人、魔王と仏が一人ずつか……。

人間って意外に少なかったんだなあ。

17. ゲーマーズスペシャリテ

友人の引越しの手伝いをしに行った。

あらかた荷造りを終えたあと、彼は封をしていないダンボールを指差して言った。

「このゲーム、もう遊び終わったからお前にやるよ。捨てるのももつたないし」

「俺、あんましゲームしないんだよなあ。売ればいいじゃん」

「こんなの売れないよ。まあ、お前が捨てる分には構わないからさ。本体も二個あるから、一個やるぜ」

そこまで言われて断るのも申し訳ないので、小さなダンボールをもらってそのまま持ち帰った。

家で中身を確認すると、『ファイナンシャルファンタスティカ』『ドラゴンズクエスト』『超・輪廻転生』『ケミカルハザード』『ゲルダの関節』等々、有名なタイトルがいくつもある。売れないということもなさそうだが……。

せっかくだから久しぶりに遊んでみようかと思い、ゲームを起動してみた。

……すぐに行き詰まった。

ストーリーが分岐分岐で、自由度が高すぎて、次に何をしたらいいかさっぱり判らない。最近のゲームってこんなに難しいのか。ちよつとしゃくだが攻略本の助けを借りるか……。

あまりにも詰まっていらいらしてきたこともあり、気分転換も兼

ねて本屋に行った。

しばらくゲームから遠ざかっているような俺でも知っているようなタイトルだ。すぐ見つかると思ったが——その作品の攻略本はいくら棚を探しても見つからなかった。

「あの、すみません。ファイナンシャルファンタスティカ^{にじゅうさん}???.?の攻略本がほしいんですが」

「えっ?」

仕方なく店員を捕まえて訊くと、反対に聞き返された。

「最新作のファイナンシャルファンタスティカ^{にじゅうに}???.?の攻略本でしたら、そちらにありますか」

「え? じゃあ、ドラゴンズクエスチョン^{じゅうごん}??.?は?」

「ドラゴンズクエスチョンは^{じゅうごん}??.?が最後ですよ。お客さん、冗談はやめてください……」

後で友人に電話して追及してみたが、彼は「うん、だから売れないんだよな」と、のらりくらりととぼけるばかりで埒が明かなかった。

恐るべし、ゲームマニア……?

+++++

『ファイナンシャルファンタステイカ』 Financial Fantastica

異世界で財テクで成り上がれ！ ファンタジック☆マネーゲーム。

『ゲルダの関節』 The Submission of Gelda

関節技オンリーの格ゲー。ボーナスステージは飛び道具オンリーの『ニルダの間接』。

『ドラゴンズクエスト』 Dragon's Question
襲い来る竜の難問^{クイズ}…。正解すれば古今東西の多彩な美竜の脱皮シーンがあなたの前に。

『ケミカルハザード』 Chemical Hazard
すべての組成は俺のもの！ 毒ガスで世界征服SLG。

『ぶよぶよ』 Buo-Buo
燃やせ！ 脂肪！！ メタボなあなたに贈るヴァーチャルダイエットRPG。

『超・輪廻転生』 Digital Rebirth Story
我死す、ゆえに我あり…。バリエーションは無限！ 死ねば死ぬほど強くなる驚異のデスゲー。

『ウィードリィ〜狂草の試練場〜』 Weedy〜Proving Grounds of the Mud Overweeded〜
^{ウィード}雑草の侵略からあなたの庭を護れ！ 草むしり&芝刈りアクション。

※最強装備はカシナートモーターラムラマサブレードの合成芝刈り機。

『ユルティマオンライン』 Yulthima Online

ご当地ゆるキャラに癒される♪ 最強の諸国漫遊まったりほっこり
途中下車の旅VRMMO版。

17. ゲーマーズスペシャリテ（後書き）

シリーズナンバーがかなり先ですが、一応マージンを取ってみました。

ちなみに最近ゲームはやとりません。しょぼしょぼ。そして止まらなくなってきた…。

18. The NINJA

忍者になった友人と久々に会った。

彼とは昔は一緒に魔法使いになる夢を語り合った仲だ。だが実現性の薄い魔法使いへの夢をいつしか諦めた彼は、困難ではあるが不可能ではない忍者への道を選んだのだ。

「それで忍術はマスターしたのか？ 隠密術とか、水遁とか」
「おう。見るか？」

彼は顔の高さで印を組み、何事か唱えた。

次の瞬間、濃緑の忍び装束に身を包んだその姿が滲んで数体に分裂した。

見事な分身だ。

にしても、いきなり分身かよ……。

分身は高速移動による残像を見せる——という術だが、それはあくまで漫画やアニメの世界の話だ。正直言って現実的には人間に可能なことだとは到底思えない。

彼は一人に戻るとにやりと笑った。

「どうだ？ 完璧だろ。水上歩行だってできるぜ」

「あの水蜘蛛ミスグモってやつ？ あれって実際にはせいぜい沼堀や湿地帯を渡ったりするもんだろ？」

「いや、この草鞋のままさ」

「いくらなんでもそれは無理だろ……」

半信半疑で言うと、彼は自慢げに言った。

「だって俺は忍者だぜ。それぐらいできて当然じゃないか。血のにじむような訓練を積んだ末にマスターしたのさ」

説明によると、確かにただ水に踏み込んだだけでは沈んでしまう。しかし印を組んで集中して、呪文で気合を入れると歩けるようになるのだという。

その後さらに彼は木の葉隠れと変身の術を披露してくれた。

どちらも印を組んで呪文を唱えようと、風もないのに木の葉が舞い、あるいは煙が出て彼の姿が巨大な蝦蟇蛙ガマガエルに変わった。

本当にこんな忍術が存在するのか。どうしても気になって、別れ際にどこの忍びの里に所属しているのか訊いてみた。

だが彼は首を横に振って言った。

「いや、独学だよ。忍者社会ってけっこう閉鎖的でな。余所者の俺みたいなのが急に仲間に入れてくれって頼んでも、受け容れてくれないんだ」

「そうか……」

「まあこれからも腕を磨いて、どこかの小さな自治体の公儀お庭番でも目指すさ。」

じゃあな。光に生きるお前と闇の狭間に棲む拙者では、もう会うこともあるまい。さらば」

そして彼は印を組んで気合を入れ、自分が投げた手裏剣に飛び乗って空の彼方に消えた。

……あいつの忍者の知識って、きっと漫画やアニメや香港映画あたりから仕入れたんだろうな。

あれじゃあ、まるっきり魔法使いだよ。

19. 作家の苦悩

締切当日なのに原稿がちっとも終わらない。

困ったときは神頼みしかないということで、神様に頼んだら「時間を三日戻してくれる」という。

これで間に合う。助かった——と安堵しながら急速に気が遠くなっていた。

三日後。

締切当日なのに原稿がちっとも終わらない。

困ったときは神頼みしかないということで、神様に——。

（繰り返し）

（繰り返し）

（繰り返し）

（繰り返し）

締切当日なのに原稿がちっとも終わらない。
困ったときは神頼みしかないということで、神様に頼んだら「何

回やれば気が済むんだ」と言われた。

だって、全部戻ったら記憶がないんだから、同じことするに決まってるじゃないか。

まったくもう、神様も片手落ちなんだから。

と思ったら神様に怒られた。

「さっさと仕事しろ！」

20. 月うさぎの見る夢は

月のうさぎを見に行った。

月に棲む月面うさぎは毛皮の不思議な光沢が珍重されて乱獲され、数が激減して保護動物に指定されているのだ。

一時期は金星の珍獣動物園で飼育も試みられたが、月を離れると彼らは「三月兔熱」マーチラビットフーバーと呼ばれる奇病に罹って気が狂ってしまうことが判明した。狂気の象徴である月に住まう彼らは、狂気の世界に慣れているため別の「正気の世界」には耐えられないらしい――。

現在は月面の静かの海付近一帯が保護区とされ、自然繁殖されている。

最近では星間旅行も太陽系外が主流となっていて、月宙港には観光客の姿はまばらだった。レンタカーを借りに行って月面うさぎを見に行くと言すと、物好き扱いされてしまった。

保護区にたどり着くと、うさぎたちは大歓迎してくれた。

彼らの文明水準は思ったよりずっと高く、言葉も通じる。喋っているうちに意気投合して盛り上がり、宴会に突入した。銘酒「月の砂漠」と、かの有名な月のうさぎの搗いた餅がふるまわれる。

月のうさぎ餅はほんのり甘く、涼しい香りがした。月の光を搗き込んでいるせいだろう。

ものすごく美味しかったことを伝えると、うさぎはこともあろうにその餅を売れないかと言いだした。

実は彼らは自分たちの毛皮を交易品にしていたのに、地球人が保護法を作ってしまったせいで収入がなくなって困っているというのだ。

地球系外の他星系では毛皮の価値が下がっていることもあり、ハ
イリスクな密輸も割に合わない。で、新商品を開発したというわけ
だ。

うさぎたちは月を出ることができないので、代理人が必要だ。

その場で契約を交わして商品名「もちつきうさぎもち」の販売を
仲介することにした。

商売は大当たりした。

他星系の特産品と較べても、星の光だの月の狂気だのが練り込ま
れたもちは珍しい上に格段に味がいい。

その後うさぎたちは太陽系連合機構と交渉して、月に独立商業都
市を作り上げた。

新商品開発にも余念がない。近々ロマンチックな甘さが特徴の「
月餅^{げっぺい}」を発売するらしい。

最後に訪れた時、彼らは獲得した外貨をつぎ込んで大きな宇宙港
を建設していた。

輸出が増大して、既存の港では手狭になったからの話だった。
護衛のためとかで、輸送機以上の数の最新宇宙戦艦もずらりと並ん
でいる。

それにしても、評議長うさぎがしきりにばやいていたのが気にな
る。

「地球政府が“月は地球の衛星なんだから、税金を納めろ”ってう
るさくて。我々は独立商業都市なのに、まったくあの二本足どもが」

「商売繁盛ってことだよ」と慰めておいたが……？

20. 月うさぎの見る夢は（後書き）

『月夜ばなし』の「週末の計画」とは恐らく世界が違うはず。

<http://ncode.syosetu.com/n5135y/>

21. 正月の病

もちを食べすぎて腹もち病になった。

腹がもちのように膨れてしまう、恐ろしい病気だ。

ぷっくりと膨らんだ腹は、触ると感触もふにふにと柔らかい。

まるで搗きたての杵搗きもちのようだ。

これはまずいと病院に駆け込んで医者に切々と症状を訴えた。

すると、「対症療法しかないから、もちを食べずに走って腹筋しろ」と言われた。

その通りにしたら腹が減ったので、今度はもちの代わりにいもを食べた。

今度は腹がいもち病になった……。

21. 正月の病（後書き）

いもち病（稻熱病）とは、イネに発生する主要な病気の1つ。単に「いもち」と呼ばれることも多い。欧米では、「イネの爆発（Blast of rice）」、「イネの疫病（Rice blight）」などと呼ばれる。＜Wikipedia「いもち病」より引用＞

とは関係ありません。

22. ひ・み・つ

遊び仲間の一人が、飲み会にうそ発見器を持ってきた。

好きな人間を探ったり秘密を暴いたり、酒の肴にして大いに盛り上がった。

だが、酔いがまわると鋭い質問が考えられなくなってくる。

発見器にかけられるのを嫌がっていた一人をようやく捕まえたころには、質問のネタも尽きてしまった。

「うーんと、じゃあー、質問に全部“はい”って応えろよ」

「……判ったよ」

「いくぞおー。ええと……んー、お前は人間である！」

「はい」

とたんに機械から、うそを知らせるけたたましい音が鳴り響いた。

あれれ？

「異次元生命体！」 「はい」 うそ。

「エルフ！」 「はい」 うそ。

「亜人種！」 「はい」 うそ。

「宇宙人！」 「はい」 うそ。

「悪魔！」 「はい」 うそ。

「天使！」 「はい」 うそ。

「妖精！」 「はい」 うそ。

「幽霊！」 「はい」 うそ。

「妖怪！」 「はい」 うそ。

「UMA！」 「はい」 うそ。

「動物！」 「はい」 うそ。

「生物！」 「はい」 うそ。

「無生物！」 「はい」 うそ……。

何、こいつ!?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6322w/>

単品集うそ風味

2012年1月14日22時51分発行